

# AI活用事例報告書

「AIの活用による英語教育強化事業」実証研究まとめ

# 令和7年度 大阪府英語教育推進事業について

# 英語教育推進事業について

## 目的

大阪の子どもたちの英語学習の特質を踏まえた4技能5領域の資質・能力を総合的に向上させる

## 府の取組み

教員研修の実施（教員の英語力、指導力の向上）

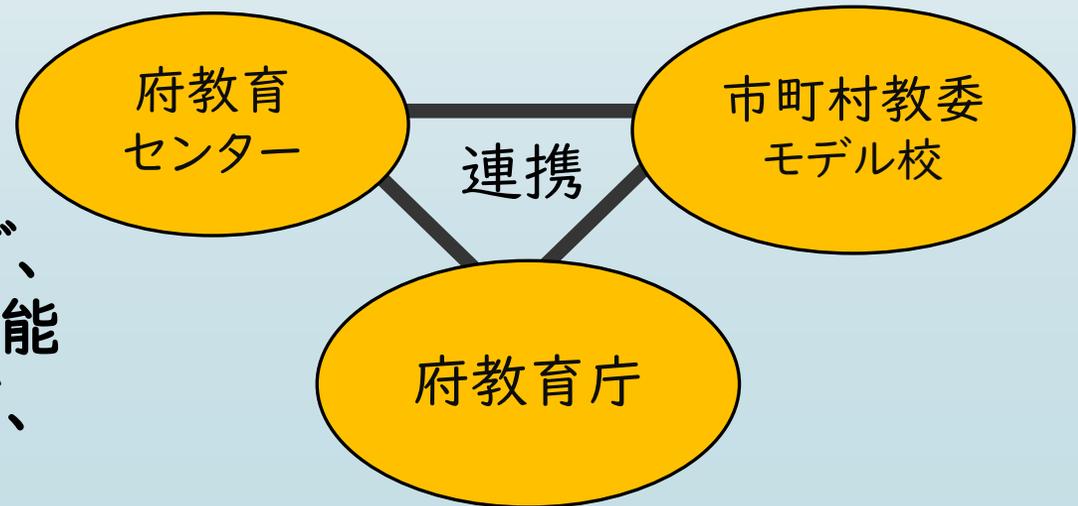
発信力強化のための実証研究⇒モデル校の指定（AIの効果的な活用の在り方や指導改善等について）

英語教育フォーラムの開催



## ゴール

府域の各校でICTを効果的に活用することで、英語教育における言語活動の質を高め、4技能5領域の資質・能力をバランスよく向上させて、児童生徒の発信力強化につなげる



# 文部科学省「AIの活用による英語教育強化事業」 ⇒AIの効果的な活用の在り方や指導改善等についての 研究を推進（研究には「BASE in OSAKA」を活用）

## ○BASE in OSAKA

⇒AI搭載デジタル英語学習ツール  
(小学校向け、中学校高校向けの2種類のアプリ)

大阪府内の公立学校で利用可能(有料)

- ・AIが発音精度や流暢さなどの観点で評価・採点
- ・英検対策等では、質問に対する自由回答についても評価
- ・教員用の管理画面で児童生徒の学習状況を管理



### 英語学習ツール BASE in OSAKA

AIによる音声自動採点 いつでも発音・スピーキングの練習!

#### Point 1

音読した音声を発音精度や流暢さなどの観点で評価・採点を行います。



#### Point 2

豊富な学習コンテンツを搭載  
英検®二次試験対策では  
質問に対する自由回答を評価します。  
その他 府立高校入試リスニング過去問 etc



#### Point 3

管理画面で生徒の学習状況を一元管理

- ・宿題配信機能
- 採点結果の一覧出力、生徒の音声を再生可能
- ・生徒の学習履歴閲覧機能



# モデル校について

モデル校では、BASE in OSAKAを活用し、児童生徒の発信力強化に向けた取組みを進めました。

モデル校	小学校（2校）	摂津市立摂津小学校 大阪狭山市立南第二小学校	義務教育学校（1校）	貝塚市立二色学園 （前期課程・後期課程）
	中学校（4校）	摂津市立第三中学校 富田林市立藤陽中学校 藤井寺市立第三中学校 大阪狭山市立南中学校	高等学校（3校）	府立いちりつ高等学校 府立富田林高等学校 府立泉北高等学校

## 取組み内容

○BASE in OSAKAを活用したスピーキングやライティング等のテストの実施

○児童生徒・教員アンケートの実施

○授業や家庭学習における、BASE in OSAKAを活用した授業実践・公開授業の実施

# モデル校における活用事例

# 活用事例（小学校版）

## 学習コンテンツ

○ 単語

○ 表現  
ひょうげん

○ アルファ  
ベット

○ 英検®  
えいけん

○ 宿題



外国のことについて話そう！

A 行きたい国を言ってみよう！その1

音読練習

会話練習

未習

A 行きたい国を言ってみよう！その2

音読練習

会話練習

未習

A 行きたい国を言ってみよう！その3

音読練習

会話練習

20%

A 行きたい国を言ってみよう！その4

音読練習

会話練習

未習

本時の目標（例）

行きたい国とその理由をたずねあうことができる

## 学習活動（例）

(1) 自分が行きたい国とその理由を記入

(2) **BASE in OSAKA**で会話練習

ペアインタビューのための練習で  
BASE in OSAKAを活用

(3) ペアで行きたい国等のインタビューを実施

(4) ペアを替えて再度インタビューを実施

# 活用事例（中学校・高等学校版）

スピーチ練習

お手本の音声

男性（アメリカ英語）

作成

音読練習を行う文章を入力してください。

Fantastic!

94点

もう一度

解答結果

■ A ■ B ■ C ■ 未読 発音：88 流暢度：97 完成度：100

American schools and Japanese schools have some differences.

In America, students usually change classrooms for each subject. They walk to math, science, English, and other classes. In Japan, students stay in one classroom, and teachers come to them.

Another difference is how students talk to teachers. In America, many students speak to teachers more casually, but in Japan students usually speak more politely.

Lunch is different too. In Japan, students often eat school lunch together in the classroom. In America, many students eat lunch in a big cafeteria.

Both schools are nice, but they have different styles.



フィードバック

- 音読速度：1分あたり100語 平均的です。
- ※音読速度は、中高生の一般的な速度を参考に算出しております。

本時の目標（例）

日本と世界の学校の違いを理解し、音読することができる

学習活動（例）

(1) 英文の内容理解

(2) 授業に関連する英文を音読

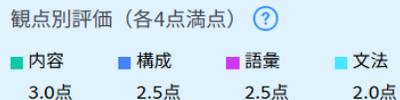
(3) **BASE in OSAKA**で音読練習

発音を確認しながら練習するために  
BASE in OSAKAを活用

(4) タブレット端末に音読を録音し、提出

# 活用事例（中学校・高等学校版）

AIの分析を参考に英文を編集しましょう



赤色は誤りと思われる箇所です 単語数：192

My name is Yuto, and I am a junior high school student. Today I want to write about climate change. I think climate change is a very big problem in the world now. The weather is changing a lot, and sometimes it is hot, sometimes it is very cold. I see many news about storms and heavy rain, and it makes me worry.

I think we must do something, even if we are students. I try to save electricity in my house. I turn off the lights when I don't need it, and I also try to use less water. My family sometimes go to school by car, but I want to walk more because it is good for the earth. My sister say walking is also good for health, so I want to do it more.

I know I can't stop climate change alone. But I believe small actions is important. If many people try, I think the world become better. I wants to learn more about the environment in the future. Climate change makes me thinking about the future of the earth, and I hope we can protect our planet.

詳細な分析へ



## ①アドバイス

■コメント ■内容 ■構成 ■語彙 ■文法

## ②文法・スペルの誤り

## 本時の目標（例）

気候変動についての考えや意見を英語で表現することができる

## 学習活動（例）

(1) 「考えや意見」をグループで共有

(2) 個人で英文を書く

思考をたすける補助役として  
BASE in OSAKAを活用

(3) BASE in OSAKAに英文を入力  
・AIフィードバックをもとに加筆修正

(4) AI分析についてグループで話し合う

(5) よりよい表現に加筆修正後、提出

# モデル校による活用報告

### AIの効果的な活用方法や取組み

#### ●児童が自信をもって伝えるために

授業の導入や復習の場面で、表現及び単語の確認等で活用した。児童が自己調整できるように学習状況を確認する時間を設けた。

また、ペアトークや言語活動の前に練習時間を設け、自信をもって取り組めるよう留意した。

#### ●表現する力、語彙力を増やすために

子どもたちの表現力を高めるために、BASE in OSAKA に搭載されている様々な表現方法等に触れる時間を設け、多くの語彙を獲得できる機会の充実を図った。

### 成果や課題、今後の取組み

#### 成果

BASE in OSAKA を活用することは、児童の自己調整力や英語力を高めることに非常に効果的であった。児童の学習意欲の向上にもつながり、発音の流暢さや語彙の幅が大いに広がった。

#### 課題

BASE in OSAKA は語彙数が多いため、すべてを活用することは難しかった。そのため、どこの Unit でのどのような語彙や表現を活用すべきかを把握しておくことが必要だと感じた。

### 実践成果の検証結果

#### ①児童生徒の英語力の変化

英語を苦手としている児童は、相手が英語で何を話しているのか聞きとれず、不安に思っていることが多い。今までの授業では、単語の練習を限られた時間で限られた回数しか行うことができなかったが、BASE in OSAKA を活用することで自分のペースで何度も聞き、確認できることにより語彙の定着が見られた。

また、ネイティブの音声に触れる時間が増えたことにより、聞き取り問題の正答率が上がった。

#### ②児童生徒の関心・意欲の変化

最初は、BASE in OSAKA の使用に不安を抱いている児童も多かったが、ポイントを多く獲得できたり、発音できる単語が増えたりすることに楽しみを感じている児童が増加している。

また、これまでは教員の支援がないと発音できなかった児童が、自分でBASE in OSAKA を活用し、課題に取り組めるようになった。

#### ③教員の指導の変化

英語で話すことに自信をもてない児童が多く、授業中の児童の発話量が少ないことが課題であった。そこで、言語活動の前に BASE in OSAKA の活用を設けることで意欲的に発話することが増え、表現も教科書の中だけのものにとどまらず、語彙の幅も広がった。

このことから、語彙を習得するための反復練習を短縮し、その代わりにBASE in OSAKA で自己調整する時間を増やすようにした。

### AIの効果的な活用方法や取組み

#### ●授業の「はじめ」「途中」「おわり」での活用

学習内容に応じて、以下のように活用方法を工夫した。

- ・授業のはじめに、本時のめあてを確認したうえで、本時の学習に関連するもの（主に単語）を練習した。
- ・授業の途中で、学習した表現を使って実際に友だちとのコミュニケーション活動を行う前に、その活動で使う表現をBASE in OSAKAで個別に繰り返し練習し、よりスムーズで、より自然なコミュニケーションへつなげた。
- ・授業のおわりに復習として、本時に学習した内容（単語・表現）について練習した。

### 成果や課題、今後の取組み

- ・BASE in OSAKAの活用について、授業者も児童も定着してきた。課題を配信するタイミングや授業内での共有方法について、昨年度に比べてより適切に行えるようになった。
- ・今後は、引き続きBASE in OSAKAをよりよく活用し、ALTや地域の留学生などと直接やりとりする際の児童の自信や英語力向上につなげたい。

### 実践成果の検証結果

#### ①児童生徒の英語力の変化

- ・「話す力」「聞く力」とともに向上した。
- ・「話す力」では、特に発音の正確さが向上した。児童が正しい発音の英語を聞いたうえで録音することで、音のつながりや音の違いを感じながら練習を繰り返した。AIにより発話のスコアが出ることは大きな動機づけになった。
- ・「聞く力」についても、自分が正しい発音をするために何度もモデルの音読を聞き、聞く力の向上につながった。

#### ②児童生徒の関心・意欲の変化

- ・AIの評価がすぐに点数化されることは児童の意欲向上につながった。すぐに返ってくる点数が刺激になり「もっと言えるようになりたい」という意欲が育った。
- ・他者と話すことが苦手な児童も、AI相手であれば気軽に話しているという場面も見受けられた。
- ・英語の習熟度に加え、どれだけたくさん練習したかもスコア化され、友だち同士で競い合ったり、クラスNO.1をめざし、学習への主体性が向上した。

#### ③教員の指導の変化

学習した表現を授業時間内に全体で練習、評価するのは、質的にも量的にも限界があるが、BASE in OSAKAを活用することで、教員は授業内で「新出表現を教えること」と「その表現を使った友だちとのコミュニケーション活動（グループワークなど）を設定すること」に時間を割き「表現を繰り返し練習すること」はBASE in OSAKAで行うという形態をとることができた。

## AIの効果的な活用方法や取組み

### ●AI機能のダブル使い

生徒が主体的に使うことができるよう、授業中に次の流れで指導を行った。

- ①やり取り（正しい発音が求められるAIとの対話式会話練習に取り組む）
- ②英作文（説得力のある内容、提示の仕方、豊富な表現や英文量の重要性に気付き、AIを使いながら何度も推敲を重ねる）
- ③スピーチ練習（カスタマイズされた自分専用のスピーチ音声を繰り返し聞き、練習を重ねることで、粘り強く取り組む姿勢を育てる）

この結果、発表を行う際に、②と③を組み合わせ、自らAIを効果的に活用するようになった。

### ●分散型学習（話す⇔書く）

教室内で生徒を2グループに分け、一方のグループは生徒同士によるコミュニケーション活動、もう一方のグループは、理解度に応じたAIを活用したタブレット学習を行ない、その後に入れ替える授業形態を採用した。その結果、Wi-Fi環境改善にもつながり、生徒がアウトプットする時間が増え、教員からのフィードバックもより細やかに行えるようになった。

## 成果や課題、今後の取組み

授業内で効果的にAIを活用するには、単元計画の段階で「どの場面で」、「何の目的で」生徒がAIを活用するのかを明確にし、十分に検討する必要がある。そのためには、教師自身が従来の指導法を大幅に見直し、AIを活用した学習を積極的に取り入れることで、生徒の学びの可能性を広げることが求められる。今後は、AIを活用することで言語活動をさらに活性化させ、最終的には生徒が英語でのコミュニケーションを楽しめる学習へとつなげていきたい。

## 実践成果の検証結果

### ①児童生徒の英語力の変化

単元末テストにおける「話す」パフォーマンステストにおいて、「おおむね満足できる」生徒が増加した。  
また、発音やイントネーションの技能向上が明確に見られた。

### ②児童生徒の関心・意欲の変化

自らの英語力に不安を抱いていた生徒が、自分自身の習熟度や学習速度に合わせて課題を選択できるため、安心して学習に取り組めるようになった。また、AIからのフィードバックを受け、目標を達成するまで繰り返し課題に挑戦する姿が見られ、学習に対する粘り強さが育まれている。

### ③教員の指導の変化

生徒の学習の軌跡を随時モニタリングできるため、教員は生徒の学習状況を把握でき、指導にいかすことができた。また、誤答の傾向からつまづきを把握しやすくなったことで、授業中に個別指導時間を確保できた。さらに、スピーチ作成の段階では、生徒の自作英作文の添削やフィードバックにかかる時間が軽減された。

## AIの効果的な活用方法や取組み

### ●英作文添削

英語スピーチの実施に向けて、英作文機能を活用した。答えを教えてもらうのではなくヒントをもらうことで、自分で再度考えたり、ペアに聞いたりしながら協働的に取り組むことができた。

### ●スピーチ練習

英作文機能を活用して仕上げたスピーチ文を、スピーチ練習機能を活用して練習を重ねた。点数に表れることや、どこかの発音をさらに意識したら良いのかなどを色で示してもらえるので、生徒の意欲がとても高く、楽しんで練習する様子が伺えた。この機能について生徒にアンケートをとったが、「中学生になって初めてのスピーチで緊張したけれど、発音など何度も練習できて、自信を持って前に立てた。」という意見が多かった。また、授業に関連する文やretelling内容をスピーチ練習にペーストし、練習を重ねた。

## 成果や課題、今後の取組み

成果:生徒が楽しみながら主体的に取り組むことができた。特に、スピーチに自信を持つことができる生徒が増え、表現の幅が広がった。今まで行ってきたスピーキング中心の授業に、どのようにAIを組み込むか考える機会となった。

課題:AIを効果的に活用できたか、生徒自身が取り組んだ課題を自己調整しながら活用できたかについて研究が必要である。

今後:引き続きスピーチ練習機能、英作文機能等を活用することで、生徒のペースで会話の幅を広げ、変容を見取っていききたい。

## 実践成果の検証結果

### ①児童生徒の英語力の変化

発音を意識し、より正確な発音で英語を話す生徒が増えた。AI機能を活用することで、答えを教えてもらうのではなく、ヒントなどが提示されるので、生徒自らが考えられるようになった。

### ②児童生徒の関心・意欲の変化

関心・意欲が高かったのがスピーチ練習機能である。点数が表れるという点や、色分けしてくれる点が意欲につながっていると感じる。また、自主学習で課題に取り組み、正解するまで何度も挑戦している生徒もいる。

### ③教員の指導の変化

どの機能をどの教材と組み合わせると効果的かを研究するようになった。教員同士で、どのように使ったかなど情報共有する場面が増え、「人ならではの」「AIならではの」という点の見極めが必要になってくるのではないかなという声も出てきた。

## AIの効果的な活用方法や取組み

### ●音読指導に活用

BASE in OSAKAの中に導入されたスピーチ機能を活用して、授業に関連する英文の音読練習に取り組んだ。スピーチ機能を用いて音読練習に取り組むことで、即座にAIからのフィードバックを得ることができた。最終の録音した音読課題の提出に向けて、質を高める良い機会となった。

### ●家庭学習における活用

長期休業期間に既習事項に関連する課題を配信した。また、復習として文法項目別課題を配信したり、生徒自身が自学として活用するシーンも見られた。回答後即座に、フィードバックを得られるため、効率よく学習できていた。

## 成果や課題、今後の取組み

### 成果

生徒がBASE in OSAKAを活用することで、即座に得られるフィードバックを参考にしながら、より上達するためには、何が必要なのかを考え、練習に取り組む姿が多く見られた。

### 課題

授業内や家庭学習で「どのように」BASE in OSAKAやAI等のツールを使用すると効果的か、今後も検討する必要がある。

### 今後の取組み

パフォーマンステストに向けてBASE in OSAKAを活用していきたい。

## 実践成果の検証結果

### ①児童生徒の英語力の変化

- ・音読練習に取り組む中で、最初は単語を一語一語読もうとしていた生徒もいたが、授業内での音読練習だけでなく、モデル音声等を参考にしながら複数回の音読練習を重ねていくことで、チャンクや抑揚、リンキング等を意識して音読に取り組む生徒の姿が見られるようになった。

### ②児童生徒の関心・意欲の変化

- ・音読練習に取り組んだ後、即座に得られるフィードバックを参考により良いスコアをめざして、何度も音読練習に取り組む生徒の姿が多く見られた。
- ・BASE in OSAKAの中にある学習コンテンツを生徒自身が選択して学習することで、生徒自身のニーズにあった学習を行おうとしている姿が見られた。

### ③教員の指導の変化

- ・これまで音読練習を行う際のフィードバックは、生徒一人ひとりの音声を聞いて行っていたが、BASE in OSAKAを使うことにより、AIがフィードバックを即座に行ってくれるようになり、教員は、より個への指導に時間をかけることができるようになった。
- ・BASE in OSAKAやAI等のツールをより効果的に使用するための手立てを考えるようになった。

### AIの効果的な活用方法や取組み

#### ●自分の作った文章を音声に

- ・プレゼンをする際に、自分の作った文章を「わかりやすく」「英語の発音で」を1つの軸にすることで、生徒はBASE in OSAKAのスピーチ機能を使って何度も練習を重ねていた。
- ・発表までの間に、休み時間などを利用して、積極的に活用している姿が見られ、発表の際の発音がよくなった。

#### ●入試問題を意識したリスニング練習

- ・入試問題の中のリスニング問題について、リスニング力に苦手意識がある生徒も反復練習をする姿が見られた。
- ・自主学習の取組みの一環として、スクリプトの内容をノートにメモをとって内容理解に努める生徒が増え、定期テストのリスニング問題の正答率も上がった。

### 成果や課題、今後の取組み

- ・BASE in OSAKAを使っていく中で、「使って便利だった」「英語が楽しくなった」という生徒の声を多く聞くことができた。活用の仕方によって、生徒にも指導者にもプラスに持っていくことができたと感じる。
- ・課題としては、効果的な使い方を引き続き研究し、目的を持って活用することである。英語力を向上させるためのツールとして、音声指導やテスト前の自主学習ドリル、コミュニケーションのやりとり練習など、いかせる工夫を考えていきたい。

### 実践成果の検証結果

#### ①児童生徒の英語力の変化

- ・文法に関しては、家庭学習でBASE in OSAKAを活用することで、小テストなどの正答率向上につながった。
- ・定期テストのリスニング問題に関して、ほぼすべての問題で正答率が高くなった。
- ・教科書の音読などの発音に関して、BASE in OSAKAを使う前よりも英語の発音を意識してリズムよく音読しようとする生徒が増えた。

#### ②児童生徒の関心・意欲の変化

- ・音声を聞きながら発音をすることが楽しいという生徒が増えた。
- ・音声練習を重ねることで、英語での発表時にも自信を持って取り組む姿が見られた。
- ・自ら進んでBASE in OSAKAを活用しようとする生徒が多く、英検問題などにも挑戦し、英語力向上に努める生徒が増えた。

#### ③教員の指導の変化

- ・AIによる評価により、個別への指導やアドバイスがしやすくなった。
- ・文法、リスニング、読解など、個々の苦手な分野や目標に合った課題の提示ができるようになった。
- ・スピーチ機能を活用することによって、発表に対する生徒のモチベーションが上がり、一人ひとりへの指導や全体へのフィードバックがしやすくなった。

### AIの効果的な活用方法や取り組み

#### ●家庭学習での効果的な発話練習

BASE in OSAKAの宿題機能を活かして、毎週決まった曜日に宿題が配信されるよう設定。自宅で発音を確認でき、新出語句をはじめとした語彙力の向上を図った。授業外でも楽しんで英語に触れることができ、学級閉鎖の際にも一定の学習量を確保できた。一部の生徒は「単語」の練習などを家庭でも自主的に行っており、点数が表示されるのが励みになると語っていた。

#### ●即時フィードバックでの自己調整

BASE in OSAKAを活用することで、その場ですぐにフィードバックを得ることができ、生徒は訂正を加えたり、良かった点をさらに伸ばしたりすることができる。また、AIを相手に取り組むことで、訂正があっても恥ずかしさを感じにくく、安心して学習に取り組める。フィードバックを受けて書き直す経験を重ねることで、自信をつけている様子が見られた。

### 成果や課題、今後の取り組み

BASE in OSAKA を活用することで、生徒が英語に触れる時間が確実に増えたと感じている。また、その効果もあって、英語を積極的に使ってみようとする意識が多くの生徒に芽生えている。

課題としては、授業の中でBASE in OSAKA を言語活動とより密接に結びつけていく必要がある。そうすることで、ツールの効果がさらに高まり、生徒への学習効果も一層大きくなると考えられる。今後は、このような成果や実践について、さらに市内の先生方へ積極的に発信していきたい。

### 実践成果の検証結果

#### ①児童生徒の英語力の変化

はっきりとした声調で、より正確な発音に近づけて英語を話せるようになった。授業の中で一人ひとりの発音をすべて聞き、訂正や肯定的なフィードバックを行うことは難しいが、BASE in OSAKAを活用することで、個々の発音や文法の理解度を把握できるようになった。また、BASE in OSAKAで学んだ表現や発音を意識しながら、その後の言語活動に取り組む姿も見られた。問題演習だけでなく、やりとり機能や英作文機能も活用できるため、自分の伝えたいことをAIとやり取りしたり、英作文の添削を受けたりすることで、表現の正確性を高めることができた。

#### ②児童生徒の関心・意欲の変化

ネイティブスピーカーの発音と自分の発音の違いを意識できるようになり、よりよい発音を心掛ける姿勢が育まれた。また、タブレットに向かって発話すると、小さな声では認識されないため、「相手に聞こえるように話す」という意識も高まった。さらに、児童生徒がいつでもアクセスして復習したり、クイズ形式の問題に取り組んだりできることから、英語学習への心理的ハードルが下がり、楽しんで学習しようとする姿が見られた。やりとり機能では、自分の言ったことにAIが反応したり、質問してくれたりすることで、伝わる実感を得ている様子が見られた。

#### ③教員の指導の変化

課題の提供とそのチェックが容易になり、業務負担が軽減されたことで、他の業務に時間を割くことが可能になった。また、発音についてもAIのスコアに基づいて指導できるため、指導の説得力が高まった。さらに、生徒全員がAI機能を活用してその場で自己訂正に取り組めるだけでなく、発音や文法の課題に取り組む過程を通して、クラス全体に共通する課題にも気づきやすくなったため、中間指導に繋げることができた。授業内で活用する際には、BASE in OSAKAの課題と他の言語活動を関連付けることで、より高い効果を発揮すると実感している。

### 活用のねらい

生徒への発音指導やフィードバックは、個別に行う必要があったが、BASE in OSAKAを活用することで、一斉に行う。

### 活用場面

#### 【英検機能】

与えられたトピックに関する自分の意見を録音する→録音した音声を聞く

#### 【スピーチ練習機能】

自分の意見を打ち込む→(BASE in OSAKAが音声化)→音声を聞く

#### 【英作文機能】

自分の意見を打ち込む→(BASE in OSAKAがAI採点)→採点結果を確認する

### 活用の流れ

	活用の流れ	主な活動	BASE in OSAKA活用のポイント
①	BASE in OSAKAに自分の意見を録音	生徒 <ul style="list-style-type: none"> <li>● トピックに関する自分の意見をBASE in OSAKAに録音する</li> <li>● 録音した音声を聞く→振り返り(1回め)</li> </ul>	✓ 録音した音声を聞きなおすことで自分の発話した内容を振り返り、改善点について確認する。
②	正しい発音やアクセントについて学ぶ	生徒 <ul style="list-style-type: none"> <li>● BASE in OSAKAに自分の意見を打ち込む(→自動で音声化)</li> <li>● 発音やアクセントに注意しながら音声を聞く</li> </ul>	✓ スピーチ練習機能は、打ち込んだ語句や文章を音声化してくれるシステムであり、本機能を活用することで、クラス全体の発音指導を一斉に行うことができる。
③	ペアでお互いの意見を言い合う	生徒 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 構成や音声・アクセントに注意しながら、ペアに自分の意見を言う→振り返り(2回め)</li> </ul>	✓ あくまでBASE in OSAKAは「練習」という位置づけ、「本番」は生徒どうしのコミュニケーション。
③	自分の意見を文字に起こす	生徒 <ul style="list-style-type: none"> <li>● BASE in OSAKAに自分の意見を打ち込む(→AI採点)</li> </ul>	✓ AI活用(英作文)機能は、AIが「内容」「構成」「語彙」「文法」の4つの観点で文章を自動採点してくれるシステムであり、本機能を活用することで、クラス全体のライティング指導を一斉に行うことができる。

### 活用による成果

#### ①本時における生徒の意識の変化

最初に生徒が「BASE in OSAKA」に自分の意見を録音した際は、自信が無いためか、全体的に声が小さかった。しかし、個人、ペア、クラス全体であらためてトピックについて考え、さらに「BASE in OSAKA」を活用し、英語で意見を伝える練習や、発音練習を行ったことで、最後には、自信をもって自分の意見を述べるようになってきた。

#### ②生徒の英語力の変化

当初は、与えられたトピックについて、即興で自分の意見を言うことに苦労している生徒が多いように見受けられた。しかし、英語学習ツール「BASE in OSAKA」を活用し、英語で意見を伝える練習を何度も重ねてきたことで、ある程度まとまりのある英語で自分の意見を述べるようになってきた。

#### ③教員の指導の変化

従来、生徒への発音指導やフィードバックは、個別に行っていたが、BASE in OSAKAを活用することで、一斉に行うことができるようになった。

### 活用における課題、今後の取り組み

・BASE in OSAKAに生徒が吹き込んだ音声や、打ち込んだ文章について、(AIのフィードバックに頼ってしまい)現状教員がフィードバックできていない。

・BASE in OSAKAを活用したパフォーマンステストの実施について検討したい。

### 活用のねらい

従来、エッセイライティングの指導は添削業務を教員が行っていたため、負担が大きかったが、BASE in OSAKAを活用することにより、より効率的に個々の生徒へフィードバックを行う。

### 活用場面

- ・エッセイライティングを論理表現Ⅱの授業内(1クラス40名)で実施
- ・フィードバックを活用して、ライティング指導を行った。

### 活用の流れ

	活用の流れ		主な活動	BASE in OSAKA活用のポイント
①	エッセイライティング(手書き)	生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ワークシートに手書きで英文を書く</li> <li>● 80語~100語 テーマは提示</li> </ul>	語数とレベル(英検2級程度)を設定し、事前に「課題」を設定しておく。
②	エッセイライティング(入力)	生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 書いた英文をBASE in OSAKAに入力する</li> <li>● フィードバックをワークシートにまとめる</li> </ul>	入力ミスがないように(単語間のスペースなど)注意を促す
③	フィードバックの改善	生徒	<ul style="list-style-type: none"> <li>● フィードバックを受けて、各自(ペア)で改善する</li> </ul>	フィードバックを受けて、どのように改善すべきかを考えさせる
④	質問への対応	教員	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 解決しなかった疑問(質問)をワークシートにまとめさせ、回収・確認</li> <li>● 次回の授業で、全体へフィードバックを行う</li> </ul>	生徒自身で英文を改善させたいうえで、疑問点を拾い上げ、全体へフィードバックを行う

### 活用による成果

#### ①本時における生徒の意識の変化

文法的なミスの改善力、文の構成力(具体例を盛り込む)、語彙力(繰り返し表現を避ける)の向上が見られた。

#### ②生徒の英語力の変化

即時にフィードバックを得られるので、修正し、次につなげようという意欲の向上が見られた。

#### ③教員の指導の変化

個別の添削業務が大幅に削減できるので、全体へのフィードバックに時間をかけることができた。

### 活用における課題、今後の取り組み

#### フィードバック機能の向上

- ・別の表現の紹介
- ・内容面(論理構成)の改善例の提示 など

### 活用のねらい

従来、パフォーマンステストは教員が個別に実施していたため、実施機会が限られていた。しかし BASE in OSAKA を活用することで、40人規模の授業内でパフォーマンステストを一斉に実施でき、所要時間や採点時間も大幅に短縮できる。さらに、第1回・第2回の結果を比較することで、生徒の到達度や課題を継続的に把握し、英語力向上をより明確に可視化することができる。これにより、生徒の学習意欲の向上を図ることをねらう。

### 活用場面

- ・学期末に授業内で実施するパフォーマンステストとして活用
- ・学期ごとのアウトプット能力を可視化するツールとして活用

### 活用の流れ

活用の流れ	主な活動	BASE in OSAKA活用のポイント
① 第1回パフォーマンステスト (1学期末)	生徒 ● BASE in OSAKAを活用したスピーキング/ライティングパフォーマンステスト①に取り組む。	✓ 音読タスクなどの別の課題を通じて、ヘッドセットの操作方法に慣れておくように指導する。
② 2学期通常授業	生徒 ● 2学期の授業を通じて、継続的なアウトプット活動を実施し、fluency (流暢さ)の向上を図る。	✓ 授業内のスピーキング/ライティング活動において、パフォーマンステストの成果につながるタスクを提供する。
③ 第2回パフォーマンステスト (2学期末)	生徒 ● パフォーマンステスト②に取り組む。 ● 第1回から第2回にかけての点数推移を分析。自分自身の成長と課題を把握することで学習意欲の向上につなげる。	✓ 第1回の結果と比較させることで、英語力の向上や課題を実感させる。3学期以降のアウトプット活動に生かせるよう、適切な振り返りを行わせる。

### 活用による成果

#### ①本時における生徒の意識の変化

生徒はスピーキングやリスニングの難しさを感じ、自分の弱点(語彙力・即興表現・聞き取り)を具体的に自覚している。一方で、英語力の向上も実感しており、アウトプット量(fluency)の改善が見られる。実際、第1回より全体の平均点が9点上昇した。

#### ②生徒の英語力の変化

多くの生徒が学習意欲を高めている。広い視野で意見を考える習慣づけや語彙力の強化など、学び方への意識も向上している。また、英検対策としての有用性を感じ、継続的な学習へ前向きな姿勢が高まっている。

#### ③教員の指導の変化

パフォーマンス課題をアウトプット活動の着地点として位置付け、BASE in OSAKA を活用して定期的実施した。その過程で、生徒に身に付けさせたい力を明確化し、それに基づいて授業を組み立てることができた。さらに、アウトプット向上を目標とした取り組みの中で、生徒がリスニングに課題を感じるなど、4技能全体に関わる課題も明らかになった。

### 活用における課題、今後の取り組み

- ・英語科教員による授業改善への活用: 蓄積されたデータを十分に分析しきれていない点が課題である。今後は、クラス全体の傾向や個々の課題を体系的に整理し、指導法の改善や次年度以降の授業設計に的確に反映させていく必要がある。生徒の英語力の段階に応じて fluency, accuracy, coherencyなどの重点課題を学年ごとに設定することで、より効果的な指導につなげたい。
- ・校内研修での共有と学習意欲/学力向上の推進: BASE in OSAKA を用いた授業実践の共有が限定的である点が課題である。今後は、Chromebook を活用した学習の具体的な成果や、生徒の学力向上の可視化につながる事例として校内研修等で紹介し、学校全体で生徒の学習意欲および学力向上を促す風土を醸成していきたい。

# 実証研究のまとめ

# パフォーマンステスト結果

## パフォーマンステスト「話すこと」平均点

校種	問題レベル	満点	検証初期(6月)	検証終期(12月)
小学校	PreA1	100	28.0	43.1
中学校	PreA1	83	31.6	42.1
中学校	A1	86	40.9	37.6
高等学校	B1	83	25.0	30.6

## パフォーマンステスト「書くこと」平均点

校種	問題レベル	満点	検証初期(6月)	検証終期(12月)
中学校	PreA1	17	10.2	10.3
中学校	A1	14	6.9	6.5
高等学校	B1	17	10.3	10.4

# 児童生徒アンケート

「緊張する」「どちらかといえば緊張する」合計の割合

	小学校	中学校	高等学校
普段の英語の授業において、英語を話すこと、話して伝えることはどのくらい緊張しますか。	47.9%	62.1%	72.8%
BASE in OSAKAを利用した英語を話すこと、話して伝えることはどのくらい緊張しますか。	28.4%	44%	69.5%

「増えた」「やや増えた」合計の割合

	小学校	中学校	高等学校
BASE in OSAKAを使うことにより、授業中における自身の発話量・発話時間はどう変化しましたか。	93.5%	82.9%	83.5%

# 教員アンケート

	増加した	やや増加した	合計
BASE in OSAKAを用いたことにより、授業中における児童生徒の英語による発話量・発話時間はどう変化しましたか。	23%	62%	85%

	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	合計
BASE in OSAKAの活用により、個別学習中に気になる児童生徒に注力して支援を行うことができるようになりましたか。	54%	15%	69%

	そう思う	どちらかといえばそう思う	合計
言語活動の充実に向けて、BASE in OSAKAは役立ちましたか。	31%	62%	92%

# 実証研究の成果

## 〈児童生徒の英語力の変化〉

- ・パフォーマンステスト「話すこと」の検証初期（6月）と検証終期（12月）のAI評価平均点の比較では上昇が見られた。

## 〈児童生徒の関心・意欲の変化〉

- ・英語学習への心理的ハードルが下がり、楽しんで学習する様子が見られた。
- ・学習到達度に応じた課題を選択できるため、安心して学習に取り組む様子が見られた。
- ・目標達成まで繰り返し課題に挑戦するなど、学習に対する粘り強さがみられた。
- ・発音の違いを意識するようになり、よりよい発音を心がける姿勢が生まれた。
- ・BASE in OSAKAで学んだ表現を意識しながら、その後の言語活動に取り組む様子が見られた。

# 実証研究の成果

## 〈教員の指導の変化〉

- ・管理画面でモニタリングすることで、生徒の学習状況を把握し、指導にいかすことができた。
- ・ドリルをBASE in OSAKAで行うことで、ペアやグループでの言語活動に注力することができた。
- ・AIによる即時フィードバックにより、個別の指導時間を確保することができた。
- ・AIの評価を参考にすることで、個別の指導やアドバイスがしやすくなった。
- ・AIの評価を使うことで、クラス全体に共通する課題にも気づきやすくなった。

# 今後の取組みについて

- 「目的・場面、状況」に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現する英語力の育成に向けた取組みの充実
- 授業や家庭学習等で、AIを効果的に活用した授業等のモデル構築
- 英語の発信力（話す力、書く力）の向上に必要な、英語に触れる機会の創出



- ・デジタル教材やAIを効果的な活用
- ・言語活動の質を高める
- ・4技能5領域の資質・能力をバランスよく向上



**発信力の向上**